

『金沢市中心部における色彩環境調査』

A Colour Survey around the Central Part of Kanazawa

YAMAGISHI masao

山岸政雄

はじめに

既報第20号 (S.51.3) における「色彩景観考・金沢」(山岸・森)の調査時から4ヶ年が過ぎた。その間、金沢市の人口は391,935 (S.50.5)人から411,951 (S.55.5)人へと推移増大した。当然のことながら、政治、経済、文化にまつわる都市機能に変化が起き、様相の一端は視覚レベルを含む、都市環境に影響を及ぼすであろうことは予想していた。たとえば、高層建築がたち並び、街の色彩や、スカイライン、アビタ、ランドマークの視覚秩序に変化が起きることなどである。

本調査では、これら諸要素のなかから、再び色彩について調査できる機会¹⁾を得たので報告したい。

1. 調査方法

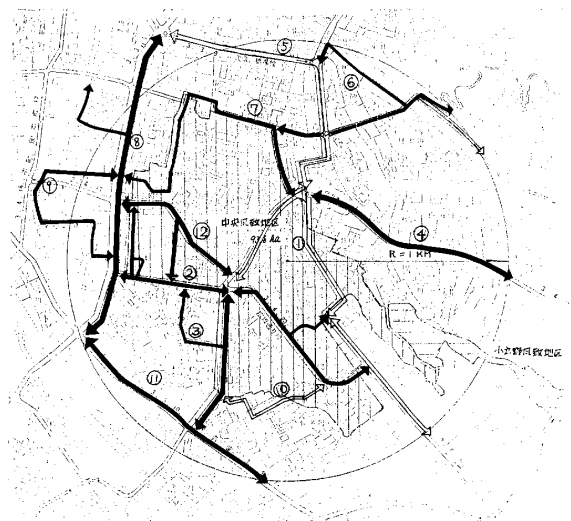
- ・調査ルート数=12 (延長約18km)
- ・調査地点=171
- ・調査件数=2057
- ・調査日=昭和55年9月1日~18日
- ・視界に入ってくる広い色彩領域を、どのように調べるかは意見の分かれるところである。資料蒐集の可能性からみて、カラーフィルム (35 mm) に撮影したものを、上下3分割、左右5分割し、条件等色の概念をもとに、マンセルシステム (Matte Finish Collection) と視感比色しHV/Cを読んだ。

- ・ルート及び地点名(○内数字は以下ルート番号)
- ①尻垂坂—兼六園下—石川門—百間堀 (文化)
- ②金沢中警察署—県庁前—市役所(官庁・文化)
- ③広坂—観光会館—中村美術館 (官庁・文化)
- ④兼六園下—扇町 (再開発・住宅)
- ⑤兼六園下—橋場町交差点—武蔵ヶ辻 (商業)
- ⑥天神橋—並木通り—浅野川大橋 (住宅)
- ⑦大手堀—尾崎神社—尾山神社 (文化)

- ⑧武蔵ヶ辻—市立図書館—香林坊—片町 (商業)
- ⑨ニューグランドホテル—長町—日銀 (住宅)
- ⑩厚生年金会館—県立工高—北国文化センター (住宅)
- ⑪犀川大通り (思案橋—片町)(再開発・商業)
- ⑫兼六園テニスコート—中央公園 (官庁・公園)



・分析構図例



・ルート図

2 調査結果

1) 色相(Hue)は、赤味、黄味、青味といった用語の親しみ易さもあって、一般に街の色を概念把握するのに好都合である。それゆえにまた、一般色名と慣用色名の混在が生じやすく、分類集計後の読みとり時に、風土条件との兼ね合いで、モニター間の意見調整に注意を要することがわかった。

最も特徴的なのは次の点である。

(1)調査ゾーン内が、いわゆる「茶色の町」であることで金沢のイメージを代表している。茶色エビ茶、黒茶、焦茶、茶ネズミ、ウグイス茶などでや、暗い感じが基調となっている。

(2)青紫系の多いのはアスファルトで、道路が視界に強い影響を与えている。

(3)緑が思う程多くないのは、中庭に緑を持つ囲まれた空間の多い金沢の街並みが原因となっている。

2) 明度(Value)は、色の属性のうちでも心的影響が大きいので環境要因としても注目される。

(1)中心部の明るさが中明度(4, 5, 6)に集中しているのは色相におけるYR系(茶色系)との相関であるが、環境色としては、金沢らしい落ちついた明るさが出てきたようである。ちなみに、既報時調査と比較した場合に一層明確となっている。

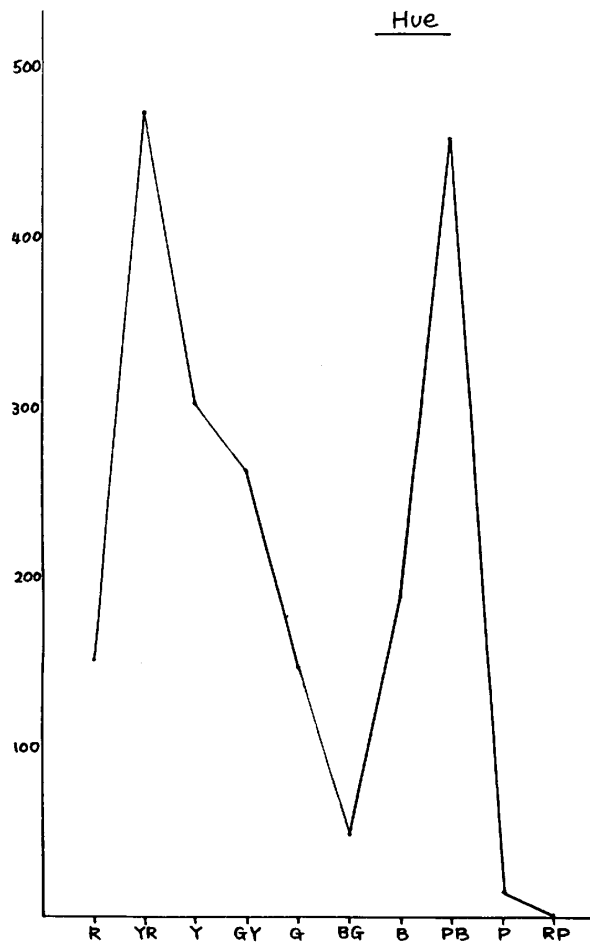
(2)高明度と低明度の少ない町は、強い乱反射と、陰うつなイメージを避けることができるので、常に気を配っておくべき要因である。

3) 彩度(chroma)は、色の澄み具合や濁り方のスケールは調査者にとって判読の最も困難なものであった。

(1)色相でみたPB(青紫)が低彩度を大きくしているが、道路舗装をアスファルトにするか否かが都市の色彩と美観を左右する。レンガや石だたみの良さをとり入れるべき証となるデータである。

(2)中彩度からや、高彩度にいたる色域は、快適な要因として大切に、緑の樹間の淡いレンガ色の組み合わせがその例である。

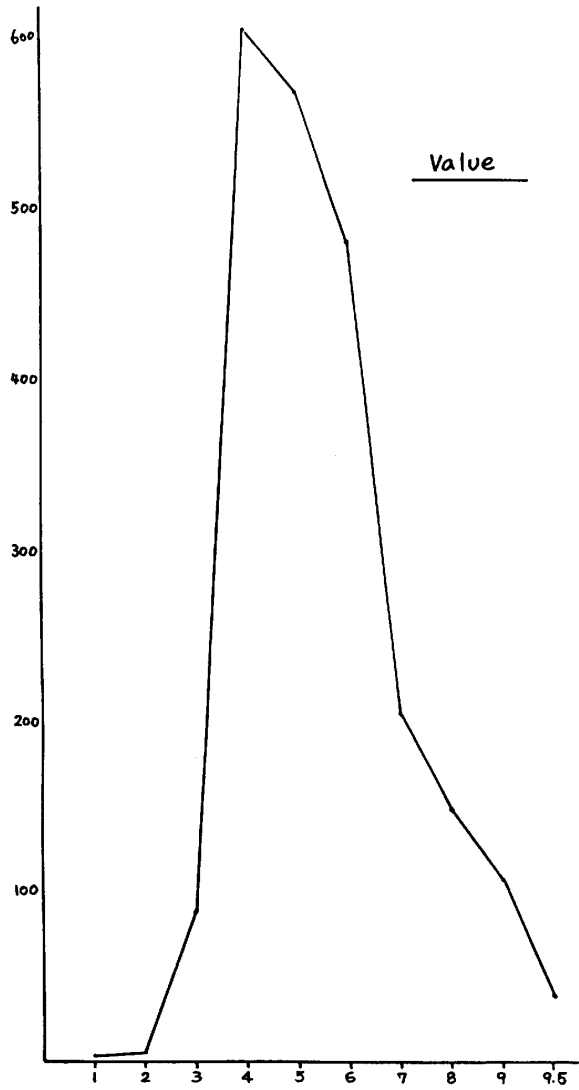
● 以下グラフ中の縦軸数値は出現頻度である。



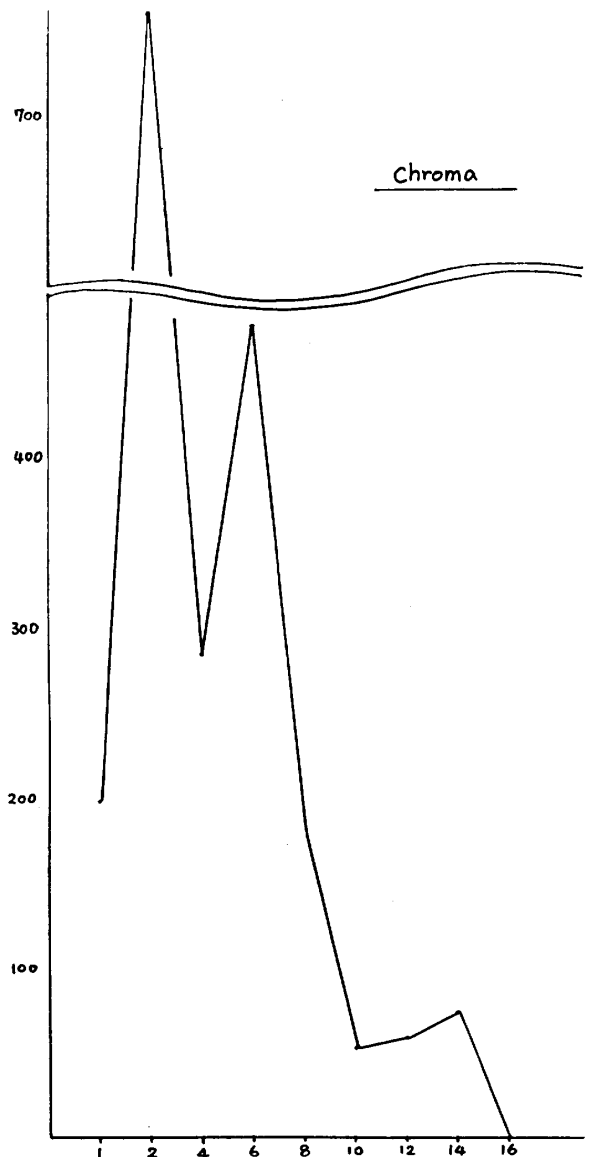
色相差の大きい景観



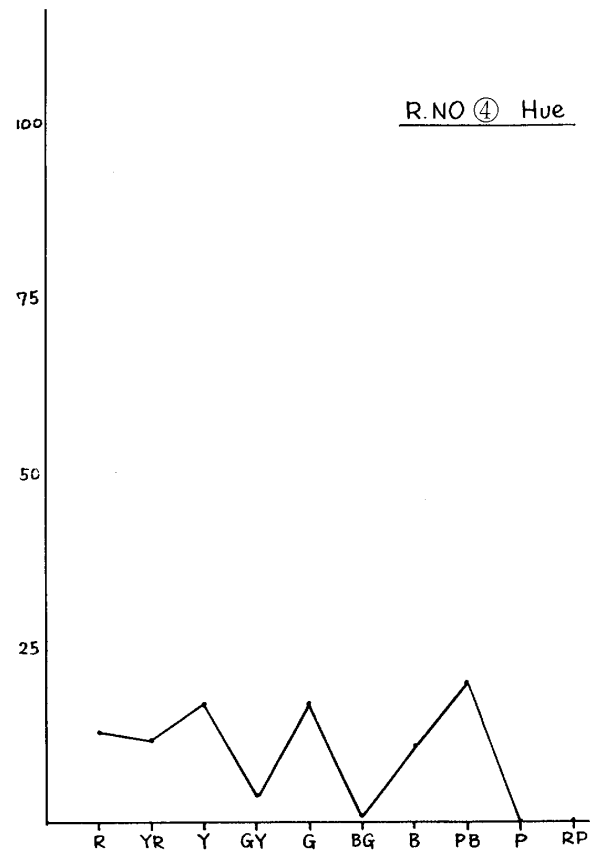
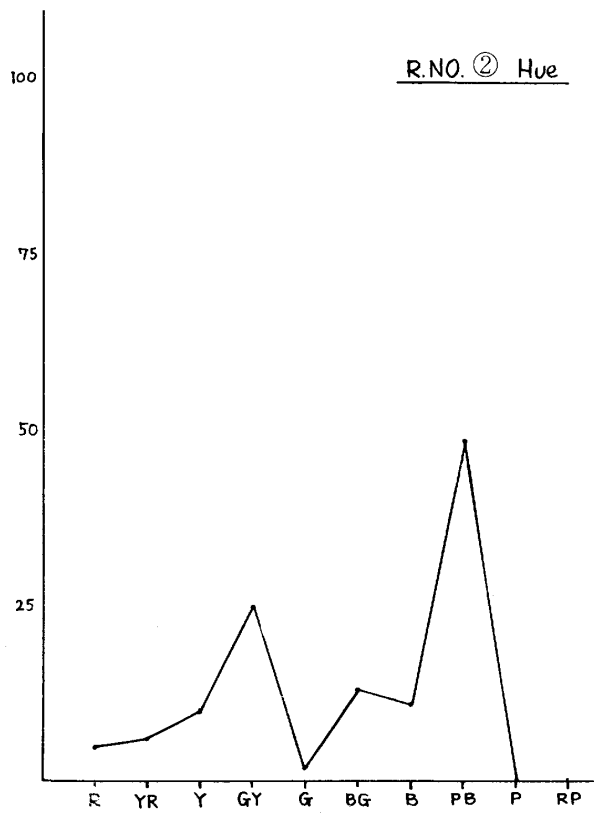
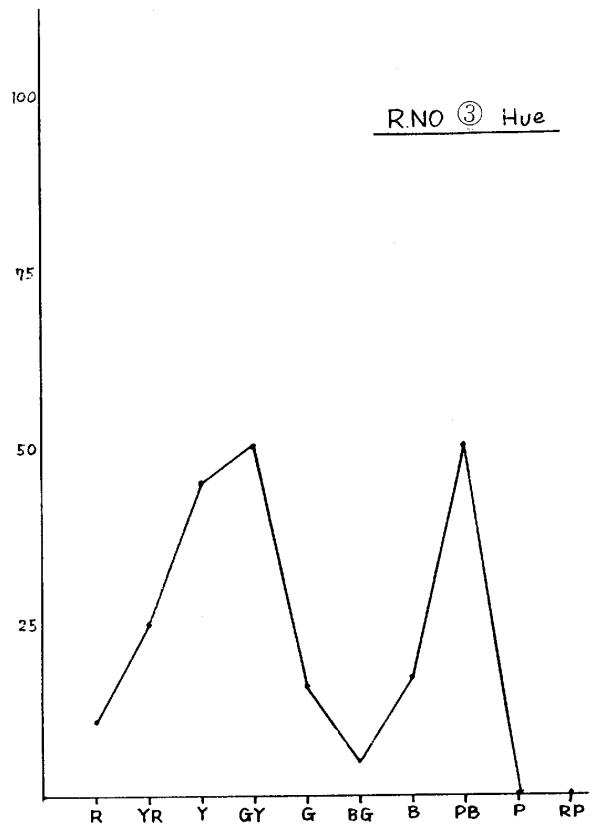
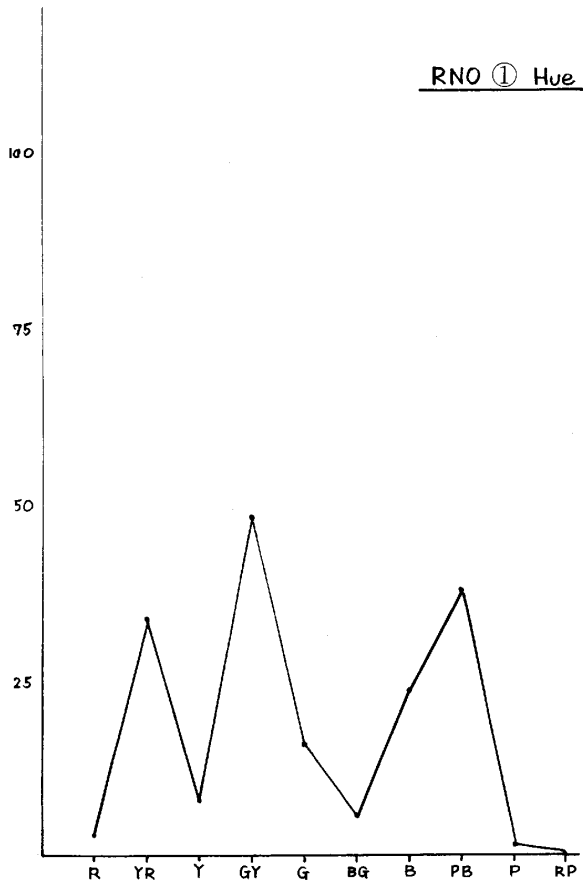
色相数の多い多色刷の町

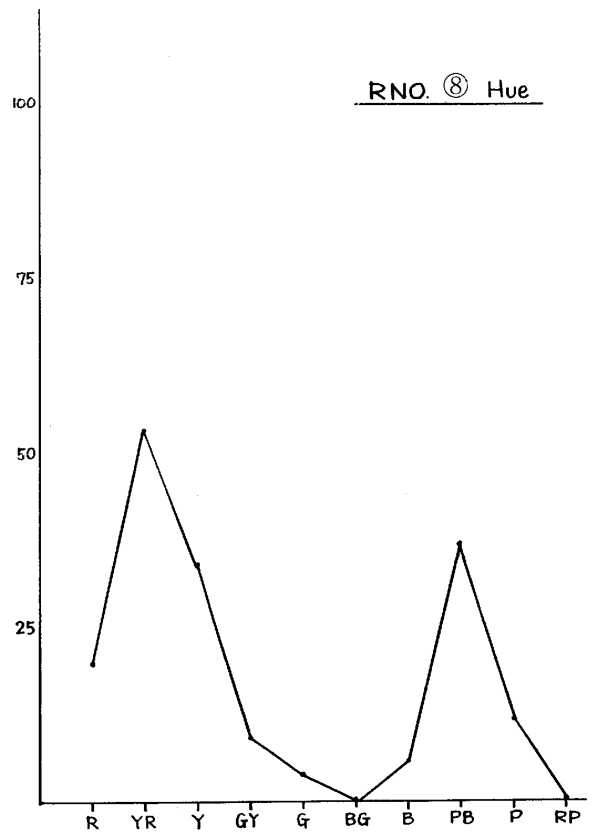
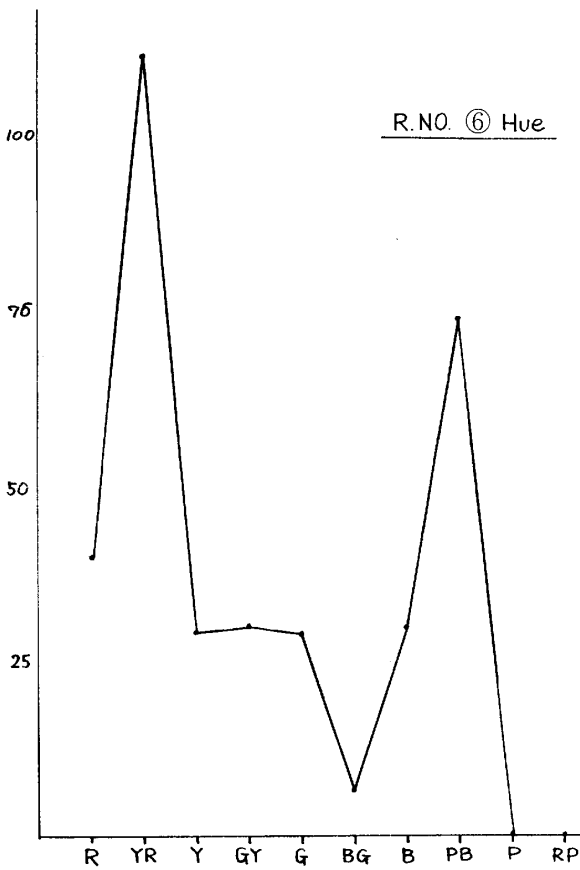
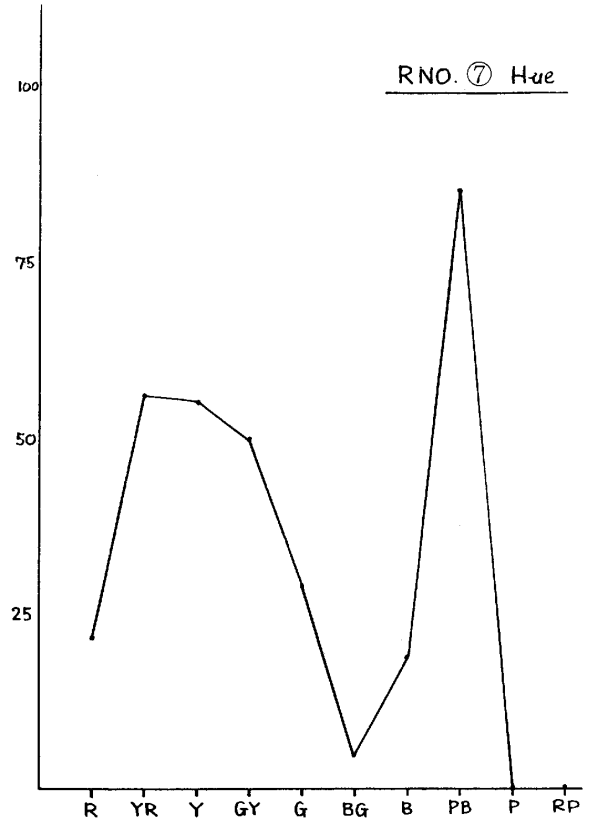
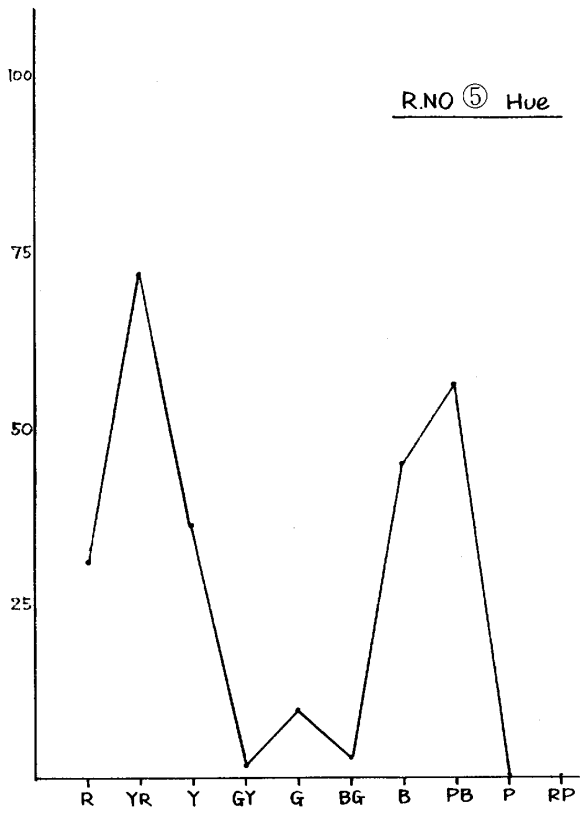


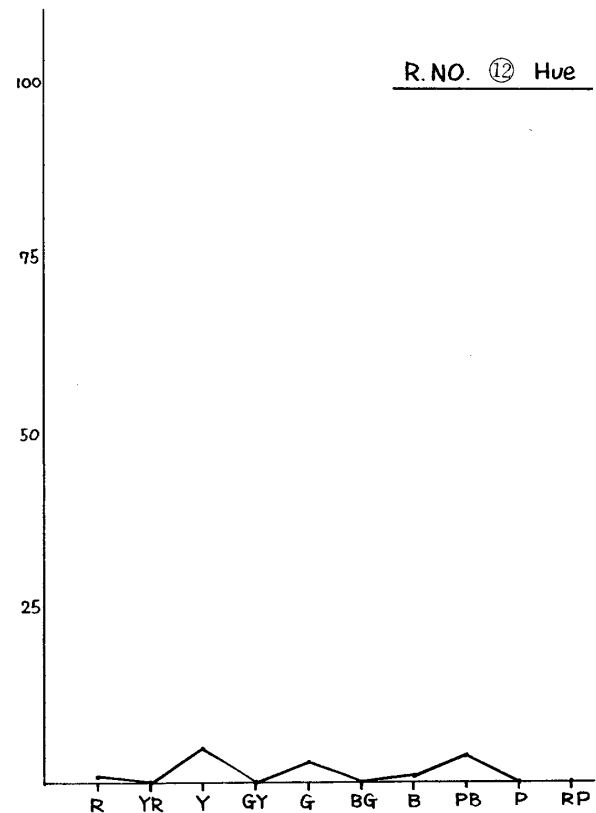
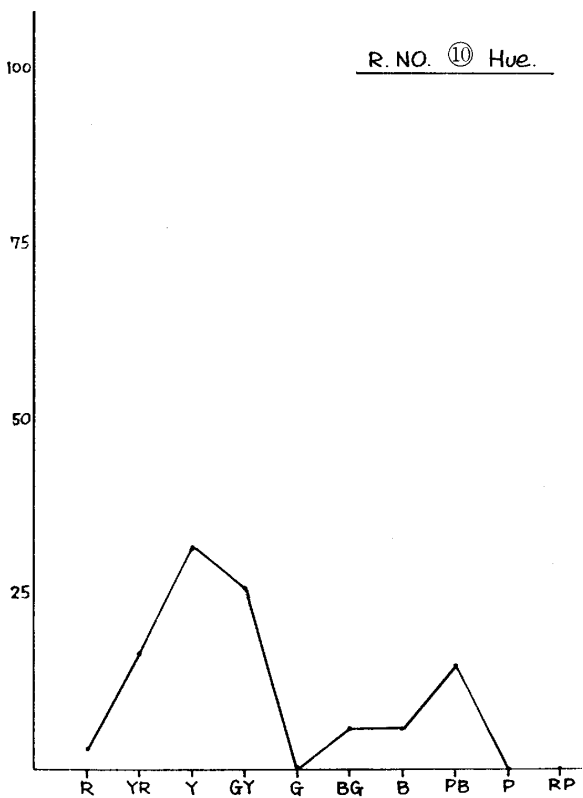
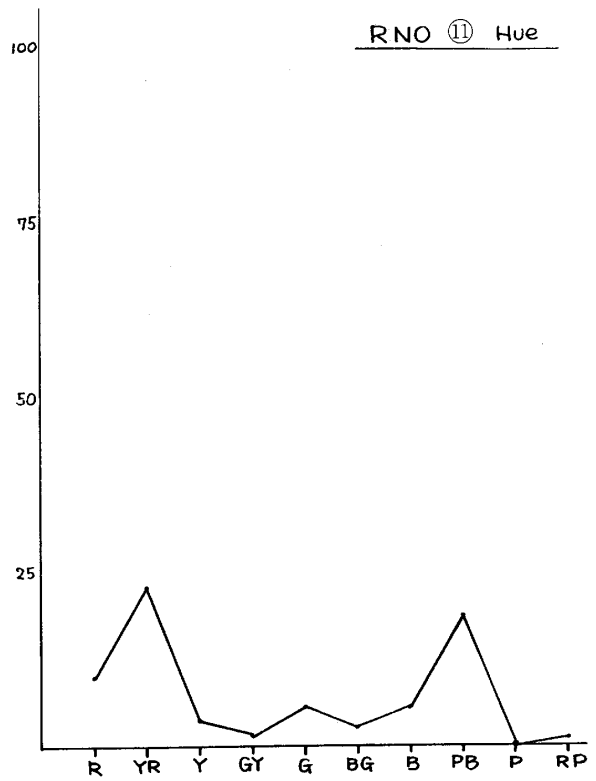
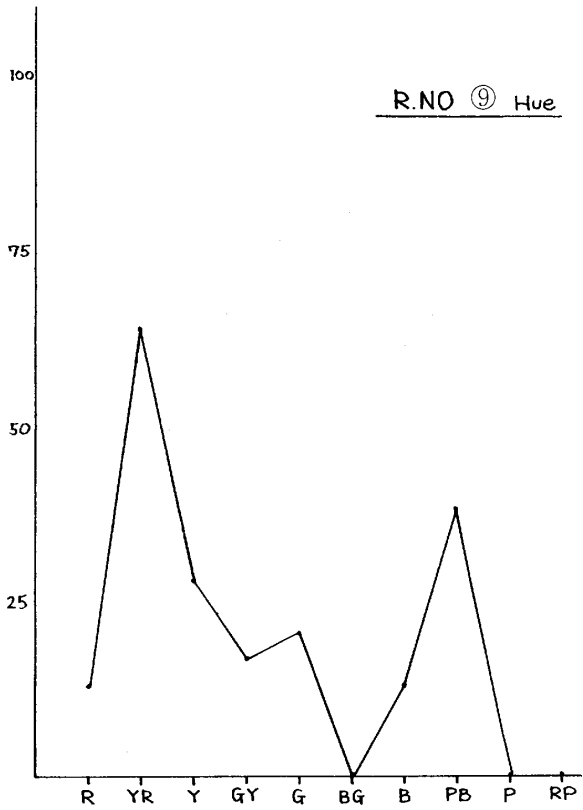
彩度で調和のとれている空間

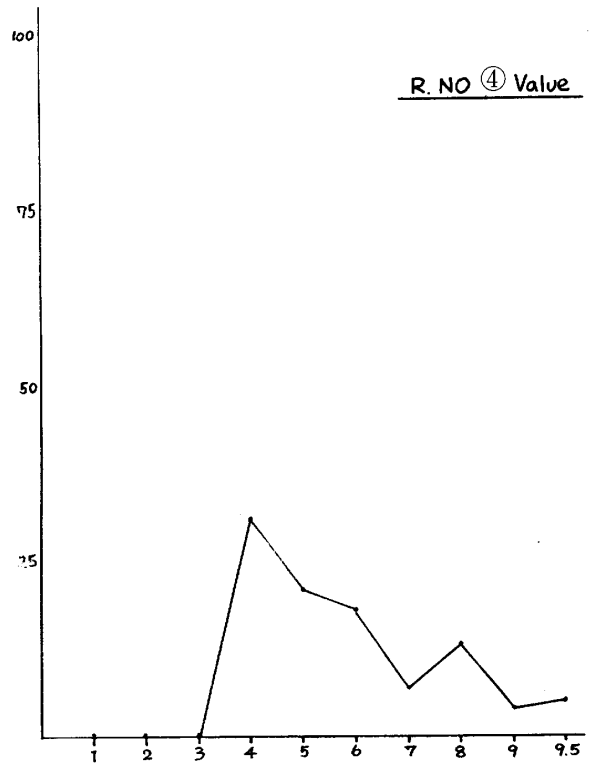
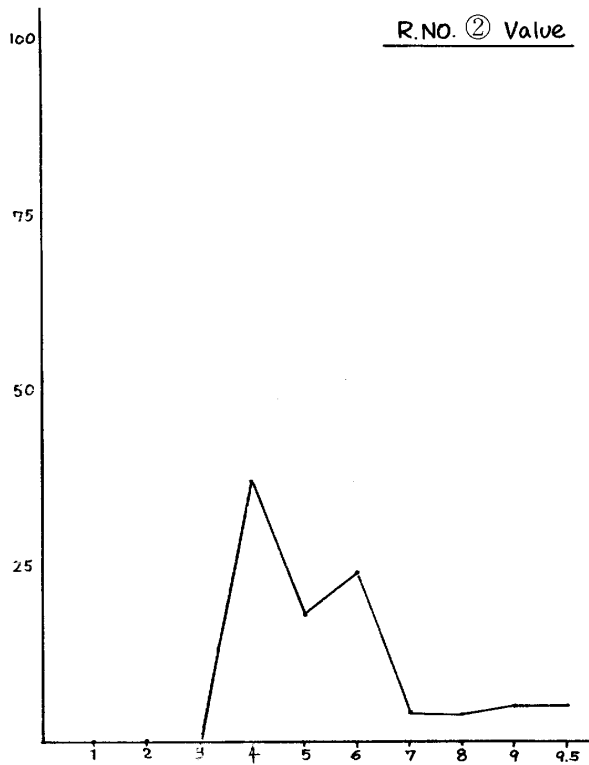
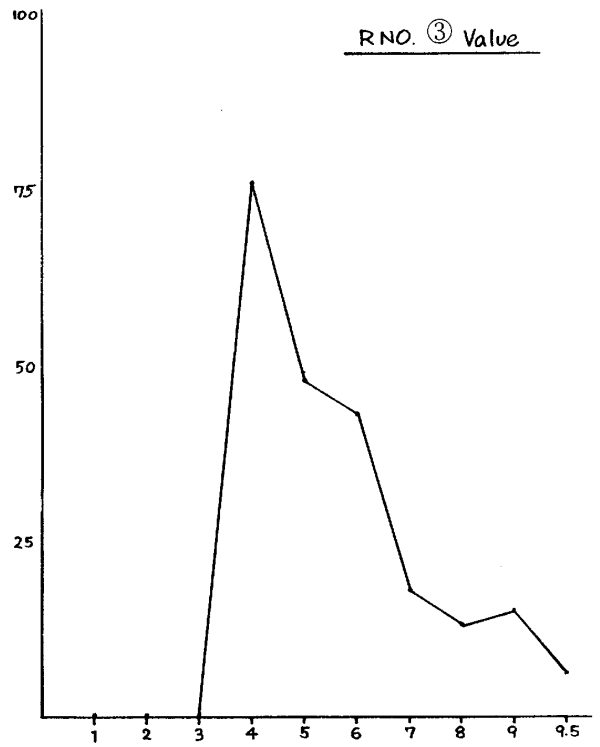
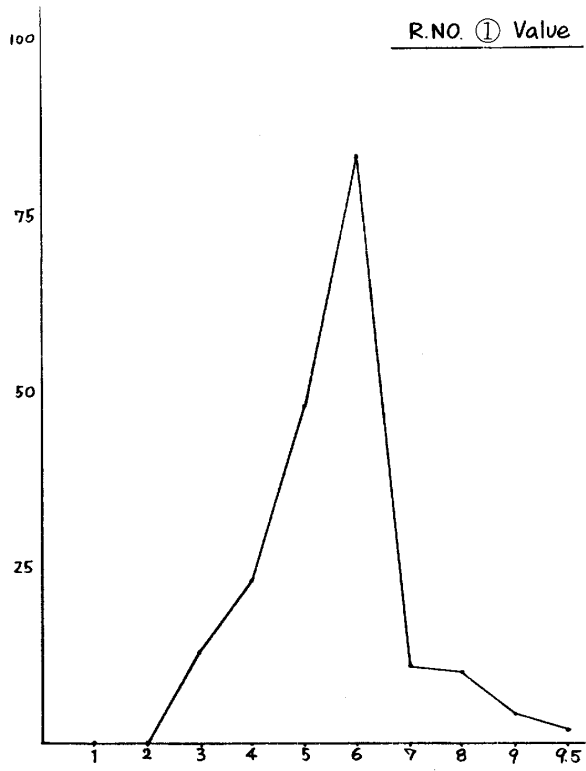


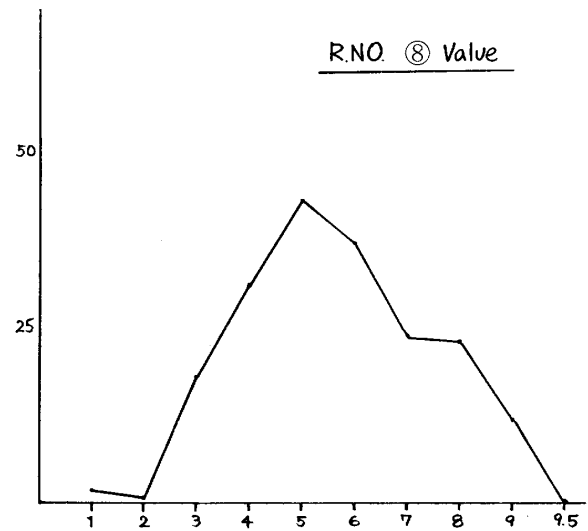
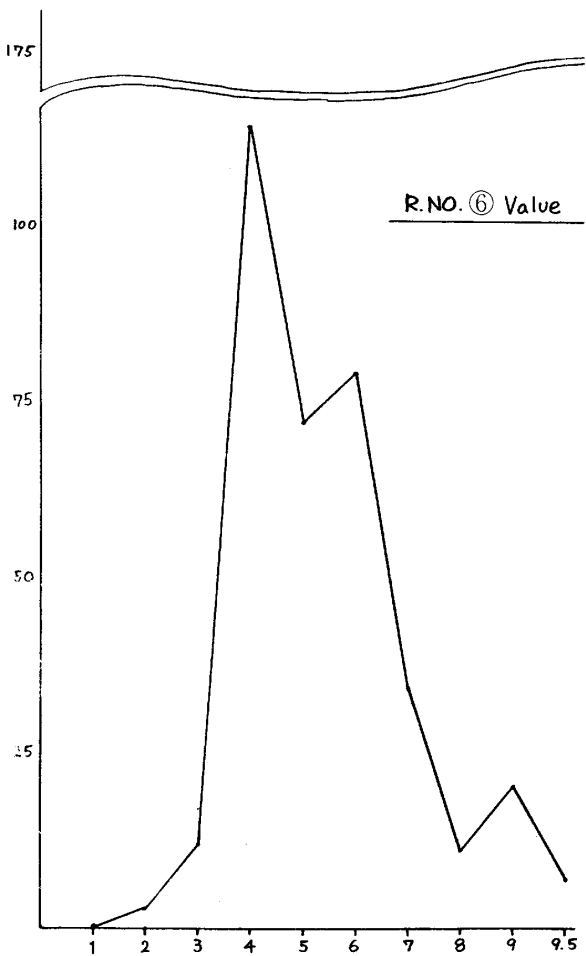
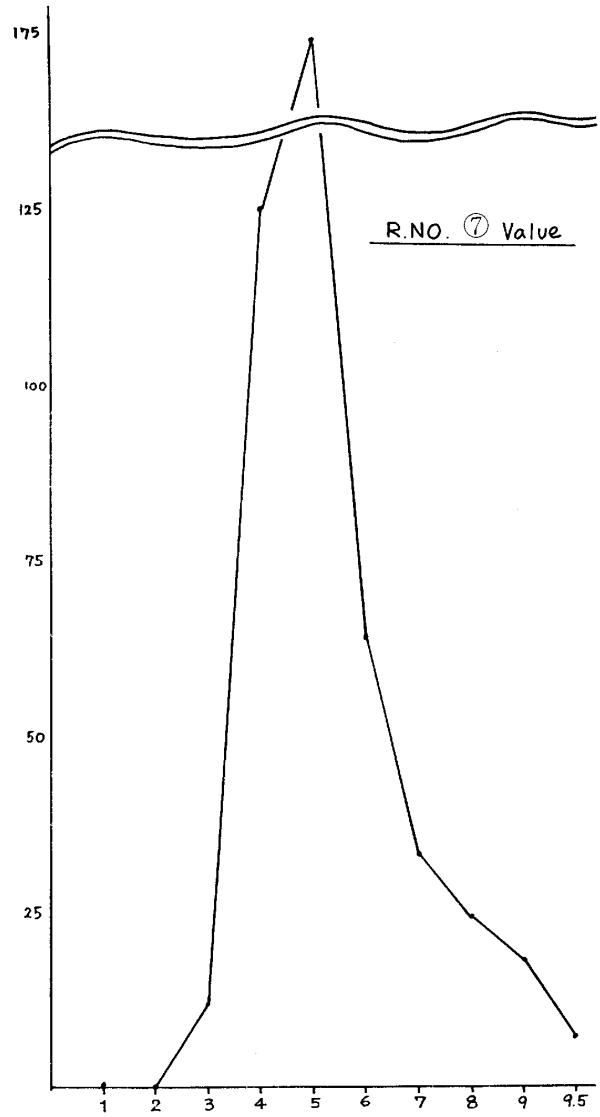
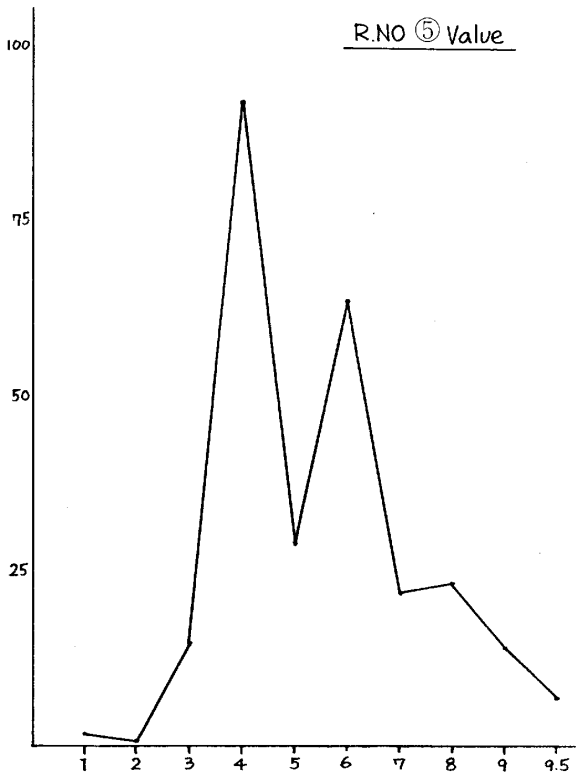
明度差のある景觀

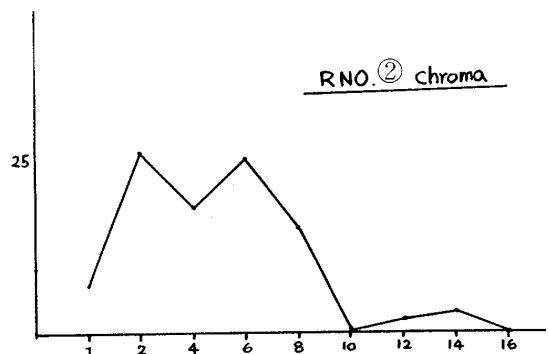
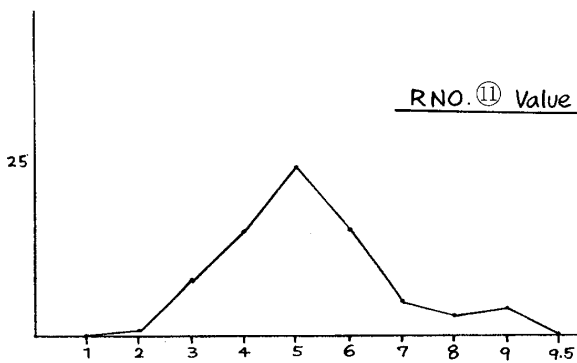
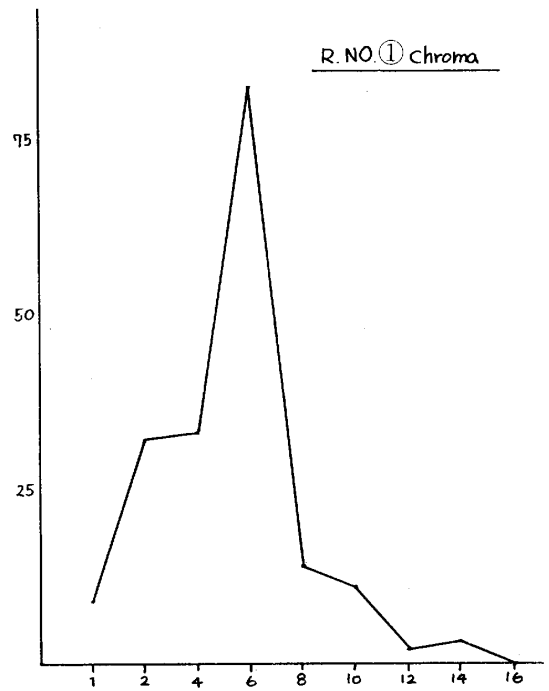
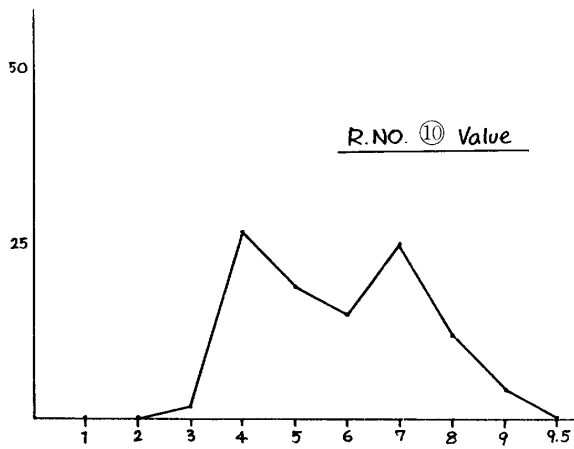
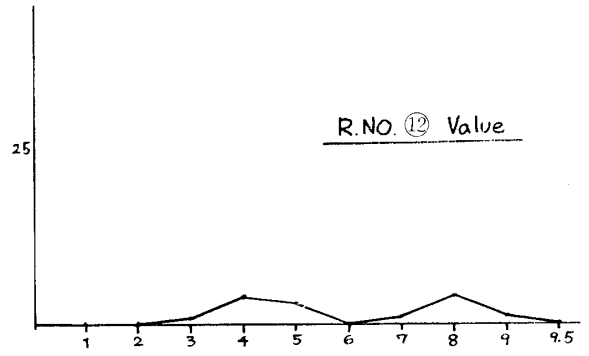
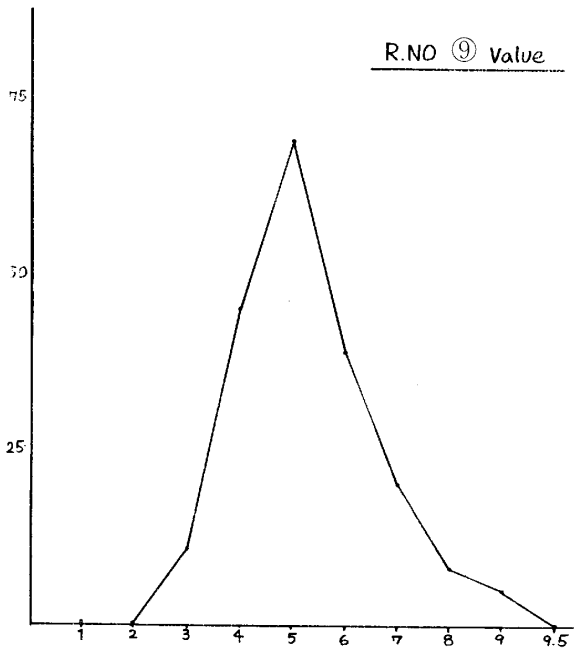


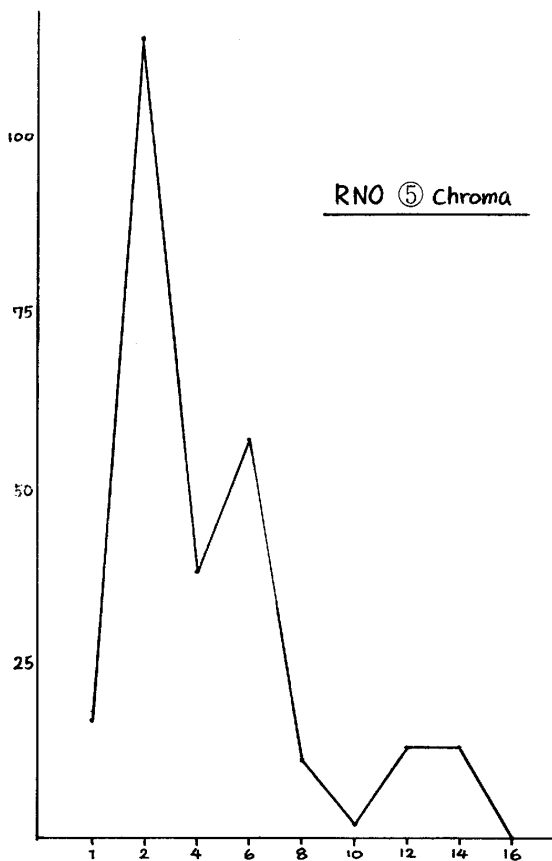
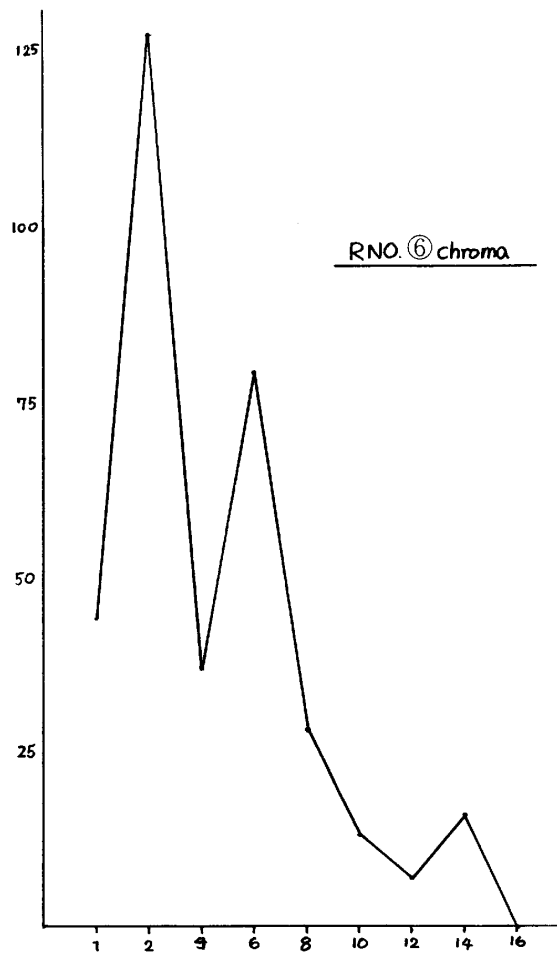
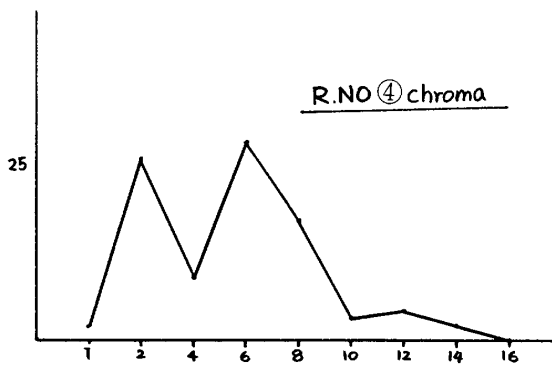
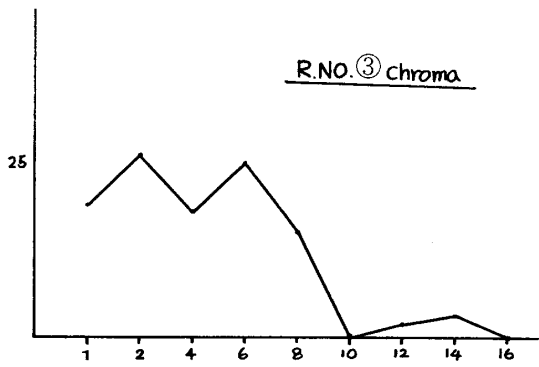


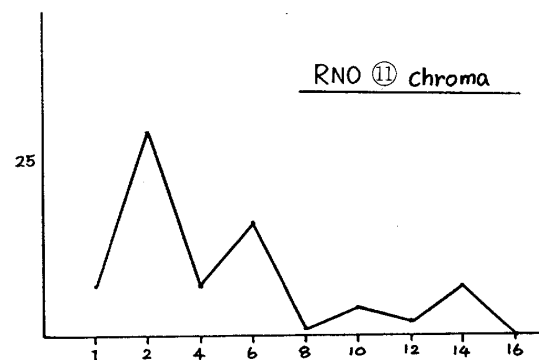
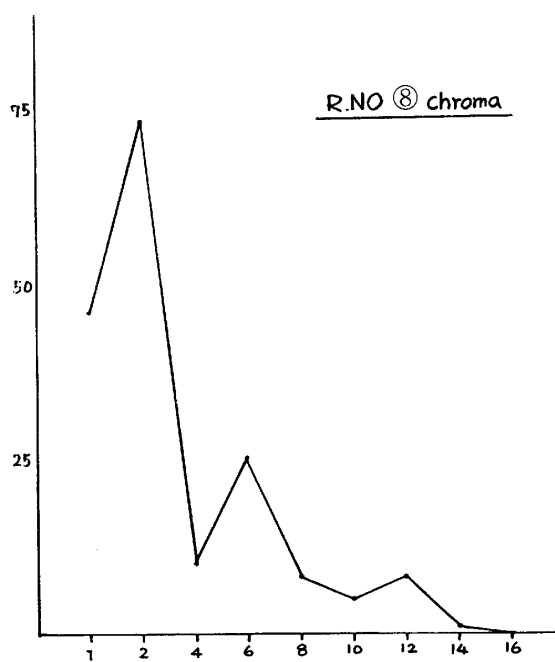
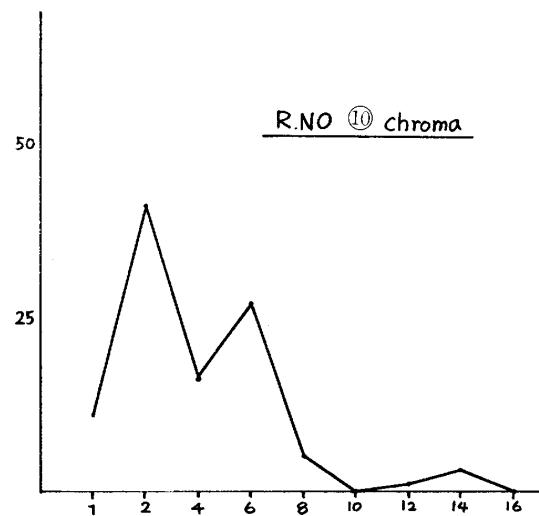
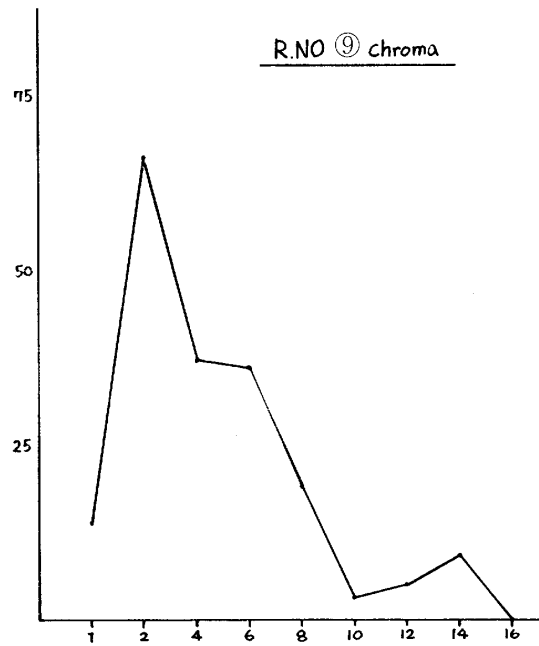
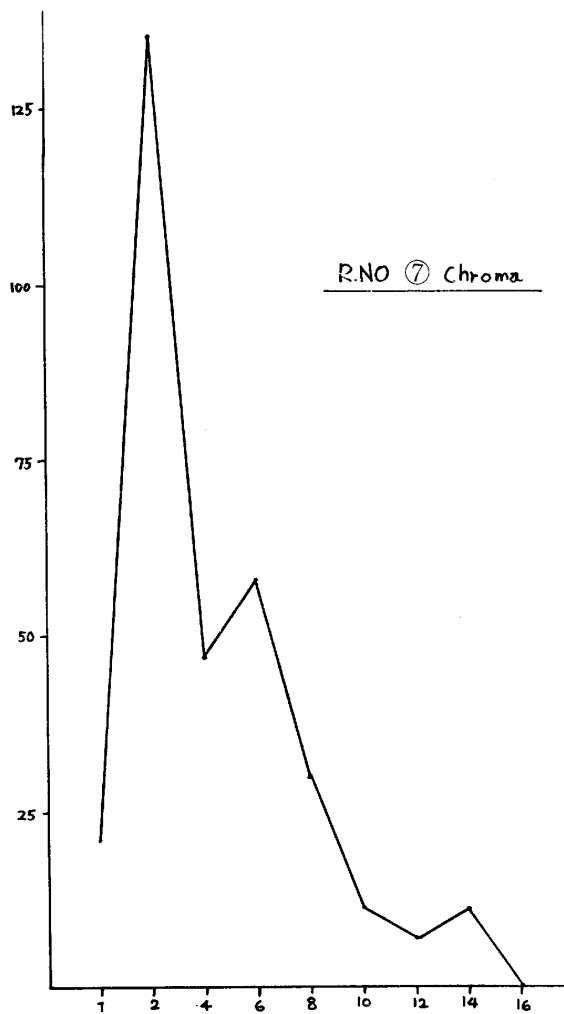


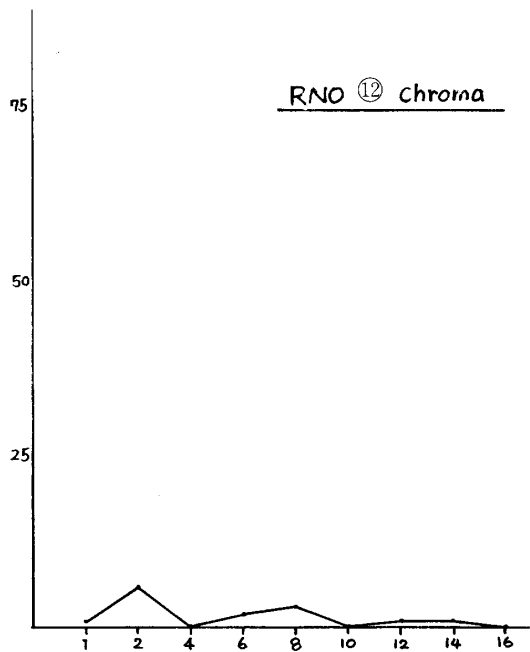








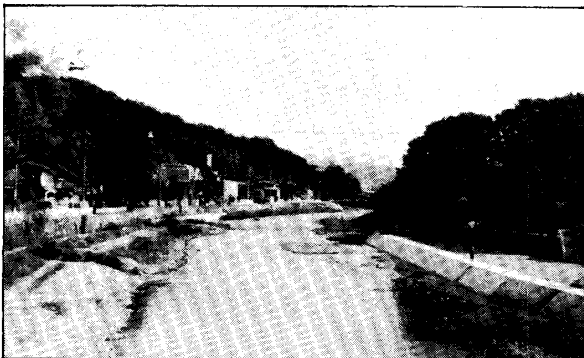




あとがき

よく、金のヴェネツィア、赤いシエナ、灰色のロンドンという。それぞれの都市や時代のイメージが明快に伝わってくる。どんな色彩が伝統都市金沢を象徴しているのかが構造的に明らかになれば、明日の都市への若干の資料となるだろう。これからの都市への問いかけは、都市自らが次々とくり出してくる情報の質と量において、全く新しいものである。車社会の生んだ記号都市や、カラーテレビなどの色彩再現の技術の進歩から、都市の色彩観相が影響を受けていることなどである。この伝統ある都市も、自らの判断と知恵で、それらへの対応を迫られていることの判る調査であった。

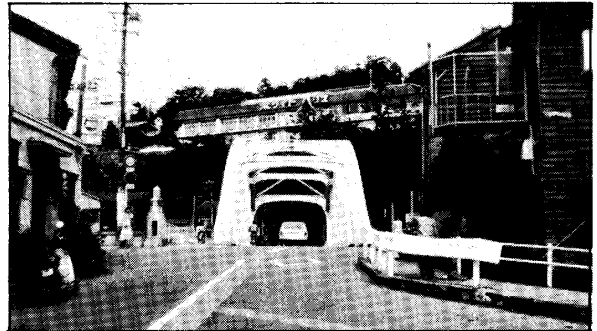
●ルート別代表例の一部景観



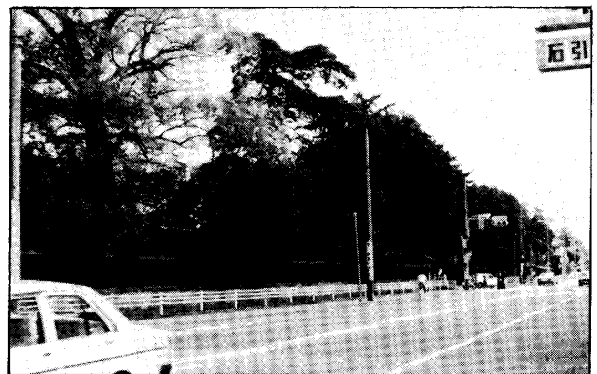
RNO⑥



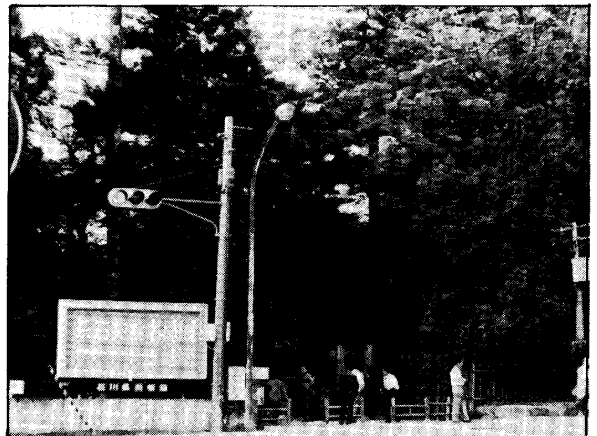
RNO⑨



RNO⑥



RNO①



RNO①

註、1) 兼六園周辺（文化ゾーン）整備懇話会—石川県企画課+地域計画研究会—1980
・調査協力—嵐治美（金美大院）他。